落窪の君が壁を越えた時

ティララ・マルティン*

1．はじめに

平安時代文学というと、日本人や日本文学に興味がある外国人は、基本的に『源氏物語』という作品を想像するであろう。しかし、平安時代文学はこの傑作だけではない。『源氏物語』以前にも様々な物語作品があったようであるが、現存する作品はそれほど多くない。その中でも十世紀の終わりに書かれた『落窪物語』が特別な位置を占めている。『落窪物語』は『うつほ物語』のような作り物語であり、『伊勢物語』や『大和物語』などのような歌物語と違い、断片的ではなく、一つの長い話をゆらぎなく展開する。要するに、現代における長編小説のようなものである。そして作り物語でありながら、超現実的な現象が含まれず、あまりにも現実的であるので、当時の社会がある程度反映されていると言われている。しかしながら、その描写された世界は現実的だとは言え、あくまでも作られた話であり、フィクションの世界であることに相違ない。『落窪物語』の登場人物は平安中期の貴族階級の人々により理想化された人間であり、悪人は極悪人になり、善人はスーパーヒーローになる。これは、江戸時代の滝沢馬琴の読本に見られる勧善懲悪小説のような世界に似ているが、幸いなことに教訓的な物語ではない。

『落窪物語』は一般に継子虐めの物語の代表作だと言われているが、ある意味で、この作品はこのジャンルのパロディーであるとも言える。西洋のシンデレラの童話的な面もあるが、『落窪物語』の女主人公である「落窪の君」は父中納言にまで蔑視され、シンデレラを救い出す王子さまに当たる道頼は、落窪の君を幸せにしただけではなく、彼女を長年虐めた父中納言一家に復讐さえ果たす。十世紀の終わりにはすでに継子虐めの話型が存在し、新しいテーマではなかったようである。古本の『住吉物語』などの散佚してしまった物語はおそらく『落窪物語』より先に書かれ、流布していたと思われる。『落窪物語』の面白さは特にそれまでの継子虐めの話型を越えたところ、その話型を崩しながら展開したところにある。

『落窪物語』の二巻の半ば以降の主人公は、落窪の君という姫君より、彼女を狭い物置部屋から救出してくれた道頼であると断言できる。この理想化された貴公子は一歩ずつ自分の復讐計画を実現する。その復讐は残酷にも見えるかもしれないが、物語の終わりには中納言一家と和解をし、ハッピーエンドで幕を閉じる。その間、落窪の君は時折夫道頼、あるいは脇役の役割を果たす「あこぎ」という女性と、その夫帯刀の行為について言及することで自分の気持を表す。落窪の君は物語の言説にあまり影響を及ぼしていないと言われているが、それは本当なのであろうか。本稿では、落窪の君はいかなる虐めを受けたか、物置部屋より救出されたとき、そして、継母に築かれた壁を越えたとき、何を考えていたのか、どうやって夫道頼の復讐を越えようとしていたのか、ということを解明してみたい。

＊カレル大学准教授

２．継子物語のジャンルの壁を越えて

まず、代表的な継子物語はどのようなものだったのであろうか。残念なことに、『落窪物語』以前の継子物語は残っていないが、『住吉物語』はそれに近いものだと想定されている。今日、『住吉物語』は鎌倉時代以降に書き直された形でしか伝わっておらず、『源氏物語』の中で言及もされるこの物語の原本がどのような話だったかは分からない。しかし、あらすじは現存本とさほど違ったものではないであろう。それは、二人の妻をもった中納言にまつわる物語である。妻の一人は高官の娘、もう一人は皇室の出である。最初の妻は娘を二人生む。二番目の妻は娘を一人生むが、娘がまだ幼いうちに死んでしまう。中納言は家族全員を一つ屋根の下に集めて暮らそうと考えるが、このことが継母による継子虐めを招く。異母姉妹どうしの関係は悪くないが、継母は、若い貴公子が継子のもとを訪れようとするのを邪魔し、実の娘の一人と結婚させてしまう。さらには、ある老人に継子をかどわかせようとさえする。一方で、違う娘と結婚した貴公子は、継子のことが忘れられない。やがて夢の中で居所を教えられ、継子を家へ連れ帰る。物語の最後では奸計が明らかになり、継母は零落して死んでいく。『キーン: 71-72』

『落窪物語』は古本の『住吉物語』と異なる点が沢山あるが、最も目立つ違いは、作者たちが復讐にこだわる点である。女流文学に一般には見られない暴力と残酷な行動には、現代の読者も驚かされる。落窪の君の夫道頼は継母に対して恨みを持ち、彼女そして彼女の一家を完全に潰そうとする意図を察することができる。

ところで、『落窪物語』の作者は未詳である。物語作者の名は『源氏物語』以降、例外的に知られる場合があるばかりで、初期物語から十世紀においてはすべて不詳である。和歌や日記文学の作者が名前を明らかにしているのに比べて、これは物語文学の顕著な特色である。秋山虔氏が指摘したように、「おそらく、物語制作は、昔話に作者がいないのと同じような理屈で、名のってなすべき仕事ではなかったのにちがいない。後代、『落窪物語』の作者として源順の名が挙げられることがあるが、彼は永観元年（983）に、七十三歳で没しており、『落窪物語』の作者にはなりえない。」『秋山: 178』いずれにせよ、書き手は男性の文人であるとされているが、たしかな証拠はほとんどないのである。しかし、あまりにも乱暴な描写をしたり、落窪の君が幸せになった後も復讐にこだわったりすることから、おそらく、書き手は男性と言えるであろう。そのうえ、当時人気のあったジャンル、継子虐めの話型をより面白いものとした。『落窪物語』は所々、『住吉物語』などの継子物語のパロディーのように見える。それまでの虐めの話はつまらないと思い、その話型を改良し、より複雑な言説に変えたようである。別な言い方をすれば、『落窪物語』の作家、あるいは作家たちは、それまでの継子物語に築かれた壁を越えたとも言える。作者はジャンルの壁を越えたのである。

３．復讐とそれに対する「落窪の君」の反応

しかしながら、それだけではない。この物語作品の女主人公である落窪の君は、ひどく虐められたにもかかわらず、夫道頼と違い、継母である北の方と父中納言一家に対して恨みを抱くことはない。落窪の君は、王統腹の姫君であるが、生母を幼くして亡くし、父の中納言に引きとられ、継母（北の方）やその娘たち（四人）と一つ屋根の下に住む。ただし、居所は別である。つまり、姫君は、床も落ち窪んだ部屋に住まわされ、裁縫をさせられたりと、ひどい仕打ちを受ける。『鈴木・藤井: 144』ご存知の通り、『落窪物語』の女主人公の名前は、継母に押し込められていたその部屋に由来する。残酷な継母は、大家族全員の衣類を落窪の君に縫わせながら、落窪自身には擦り切れ

た着物しか与えない。そんなある日、道頼が彼女の噂を耳にした。老いぼれた父親の家で、囚人のように使われている美しく若い娘がいるという噂である。興味を覚えた道頼は、落窪の君に仕えるあこぎという女の手引きで、彼女のもとを訪れる。最初は遊び半分であったが、次第に落窪を愛するようになり、妻にしようと決心する。ところが、落窪の君から道頼にあてた手紙が継母の手に落ち、継母は落窪に男の訪問者があることを知る。便利な縫子を取られてたまるものかと怒った継母は、物置部屋に落窪の君を閉じ込め、錠を下ろしてしまった。さらに、「典薬の介」という好色な老人に夜間その部屋を訪ねさせ、落窪の君を辱めようとするが、落窪はあこぎの協力を得てそれを阻止する。やがて、道頼が落窪の君をそこから助け出し、自分の家に連れ帰る。『キーン: 67』落窪の君はここで、物置部屋から救出され、抜け出ることのできない囲みから逃げ出す。それまで越えられなかった物理的な障壁、本当の壁をやっと越えることができたのである。『住吉物語』あるいは、西洋のシンデレラはここで話をハッピーエンドで結ぶが、『落窪物語』の作者はさらに話を展開する。

道頼は落窪の君を手に入れただけでは満足できない。落窪へのひどい仕打ちを思うと、落窪の家族全員に仕返しをしなければ気がすまず、あの手この手で迫害者への復讐を開始する。物語は、落窪の君の救出以降の二巻と半分をかけて、たっぷりと報復を語り尽くす。道頼は、継母の四番目の娘を愚かな醜男、面白の駒、と結婚させ、子供まで作らせる。これを恥として三番目の娘の婿は逃げ、通わなくなる。続いて賀茂の祭りの車争いで、継母たちをいためつける。そして、スケベ爺の典薬の介をこらしめた。『鈴木・藤井: 146』落窪の父親からは、大金をかけて改築した屋敷を取りあげたうえ、優秀な召使も全員引き抜いた。もちろん、最も厳しい仕返しは継母に向けられ、道頼は様々な方法で彼女を辱める。こうして父大納言一家が落魄し、道頼の慈悲にすがるほかなくなったとき、はじめて落窪の君の家族を許す気になる。道頼の怒りの原因より、むしろ中納言一家へのサディスティックな仕打ち『キーン: 68』の描写が印象的であるが、一方で、落窪自身の行いや、この復讐劇に対する彼女の反応を忘れてはいけない。もちろん、落窪の君は道頼に救出されたとき、嬉しかったであろうが、道頼の復讐には決して賛成しなかった。落窪はそれを、「終始悲しみ、反対し、やめさせようとする。あくまで心優しい姫君であった。」『鈴木・藤井: 146』例えば、賀茂の祭りでの乱暴な事件の後に、次のような会話がある。

女君はいとほしがり嘆きたまへば、衛門、「さはれ、いたくな思しそ。あいなし。おとどのおはせばこそあらめ、典薬がうたれしは、かのしるしや。」と言へば、女君、「いと心づきなかりける。わが人にはあらで、君の人になりね。それこそかく物はしふねく思ひ言へ」『落窪物語・堤中納言物語: 209-210』

女君（落窪の君）は源中納言（父中納言）の北の方（継母）一行を気の毒がって、お嘆きなさるので、衛門（あこぎ）は、「お嘆きになるのはもっともですが、ひどく心配なさいますな。むだなことです。一行の中に、父中納言様がおいでになったのならばともかく、典薬の介が打たれたのは、あのことの罰でしょう。」と言うと、女君は、「お前は本当に気に入らないことを言いますね。私の女房ではなくて、衛門督様（道頼）付きの女房になりなさい。あの方はそのように何事も執念深く思ったりしなさる」『三谷栄一・三谷邦明訳、括弧ティララ』

老中納言は落窪の君の母が持っていた三条邸を修復し、素晴らしい御殿を造るが、道頼はそれを横取りしている。それに対する落窪の反応は、次のように描かれている。

女君つくづくと聞ひ見たまひて、「この渡らむとしたまふ所は、三条にこそありけれ。また『まろ』と聞こえむものを。年ごろつくりて渡らむとしたまふらむに、防げたらむはいかに思すらむ。親の嘆きたまふらむは、罪いとおそろしく。つかうまつる人だにこそあれ、かくしたまふことを防げたまへば、嘆かせたてまつるが心憂きこと。」『落窪物語・堤中納言物語：226』

女君（落窪の君）はじっと心をこらして御簾越しに見たり聞いたりなさって、「〈今度引っ越しなさろう〉とする所はあの三条邸であったのですね。また『私のせいだ』と噂されましょうのに。父の中納言は長年あの邸を造営して〈引っ越しなさろう〉としていらっしゃるのに、それをじゃましたらどんなにお思いになるでしょう。親が嘆きなさるようなことをするのは罪がたいそうおそろしく存じます。あなたにお仕えする家来が父にじゃまだてするのでさえいけないのに、あなた様までが、父中納言のこのようになさることをじゃまなさるので、父を嘆かせ申すのが私にはつらいことです。『三谷栄一・三谷邦明訳、括弧ティララ』

４．恨みや憎しみの壁を越えて

落窪の君はさんざん虐められたのにもかかわらず、中納言一家に対して恨みなど抱いていない。それどころか、自分が幸せになったので、自分を最も虐めていた継母まで幸せにしようと思っている。現代文学に慣れ親しんでいる私たちにとっては、想像できない大きな転換のように見えるが、自分の家族を何よりも大事にしていた平安朝貴族の人たちにとっては、納得できる転換だったのではないであろうか。道頼は大納言、左大臣ついで太政大臣まで至り、落窪の君も子供に恵まれ、娘を入内させ、息子たちも昇進した。長い復讐のあと、道頼も後悔していたようで、自分がやったこと、自分の行為で与えた損害を償うため、落窪の君と一緒に広い家族を築き始めようとする。敵であった中納言一家が道頼の家族になったため、落窪の君の父に大納言の職をゆずり、継母の四番目の娘を太宰権帥と再婚させる。落窪の君が道頼にそうさせたとも考えられるが、おそらく彼も徐々に自分の継母に対しての恨みを乗り越えたのであろう。落窪の君もまた、自分のやさしさで恨みの壁をこえたに相違ない。継母も最終的に、悪口をいいながらも、感謝をし始める。そして、驚くことに、周囲にも継子の良さをわかってもらおうと、やっと悟ったように、四番目の娘に継子の良いところを教える。

北の方「いやいや継子の徳をなむ見る。さ知りたまへれ。このあんなる子ども、ゆめゆめ憎みたまふな。おのが子どもよりもかなしうしたまへ。おのれはむかし憎まざらましかば、しばしにても恥を見、いたき目は見ざらまし。」とのたまへば、四の君、「まことにことわり」と言ふ。『落窪物語・堤中納言物語：326』

母北の方（継母）は、「ますます継子のおかげを受けることね。そうだとよく心得ておきなさい。ここにいるという先妻腹の継子たちを決してお憎みなさるな。自分の子供よりもかわいがりなさい。私は、昔、あの女君（落窪の君）をもしも憎まなかったら、たとえ一時でもあんな恥を受け、痛い目には遭わなかったのにねえ」とおっしゃると、四の君（四番目の娘）も、「本当にそのとおりですね」と言う。『三谷栄一・三谷邦明訳、括弧ティララ』

５．結論

以上、『落窪物語』には、様々な壁の越え方が見られる。まず、作者たちは、継子虐め物語というジャンルの壁を越え、シンデレラの話型を、復讐と恩讐のテーマで改良し、面白くした。続いて、

女主人公である落窪の君は、落窪や物置部屋から救出されたことで、物理的な壁を越え、そして、怒りと復讐をしようとする気持ちの壁、精神的な壁も越えた。落窪の君は、初めから終わりまで、優しい人、恨みや憎しみを感じない女性であった。しかし、作者たちは、そこにとどまらず、話の極悪人に相当する中納言の北の方、落窪の君の継母も、恨みや憎しみの壁を越えることができたと描いてみせた。この面で、復讐と恩讐譚は、この作品の構造の中で、重要な役割を果たしている。『落窪物語』の作者は、この平安時代らしくないテーマを、おそらく意図的に入れたと断言できると思う。

参考文献

秋山虔『王朝文学史』、東京大学出版会、2000.
キーン・ドナルド『日本文学の歴史、古代・中世篇 3』中央公論社、1994.
鈴木日出男・藤井貞和『日本文芸史―表現の流れ、第二巻 古代Ⅱ』河出書房新社、1986.
三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二『落窪物語・堤中納言物語』（新編日本古典文学全集17）小学館、2000.